

【注目の出土遺物】

今回の調査では、青銅やガラスなど、弥生時代には貴重であった素材で作られた遺物が多く見つかりました。

(1) 銅鏃 (青銅製の矢じり)

- ・7点出土。これまでの調査で出土した点数を合わせると45点となりました。原の辻遺跡(長崎県、約180点)、旧練兵場遺跡(香川県、約80点)に次ぐ日本有数の出土点数となりました。
- ・形態は、三角形や逆V字形、矢印形のものなどバラエティーに富み、日本海沿岸や近畿地方で多く見られるタイプを含んでいます。
- ・これまでに出土した銅鏃も同様の傾向を示しており、各地域の特色を示す銅鏃が交流によってもたらされた可能性が考えられます。青谷上寺地遺跡の交易拠点としての性格がよりいっそう明瞭となりました。



銅 鏃

(2) 玉類

- ・弥生時代の玉類は、身分の高い人々の装飾品に用いられた貴重なものでした。今回の調査ではガラス玉、緑色凝灰岩製管玉、水晶製算盤玉などが出土しました。
- ・ガラス玉は勾玉1点、管玉1点、小玉16点のほか、「加工途中品」と考えられるものを確認。素材となるガラス破片(既存のガラス製品を砕いたもの)が鑄型の上で熱せられ、溶けてくっついた状態のものと考えられます。

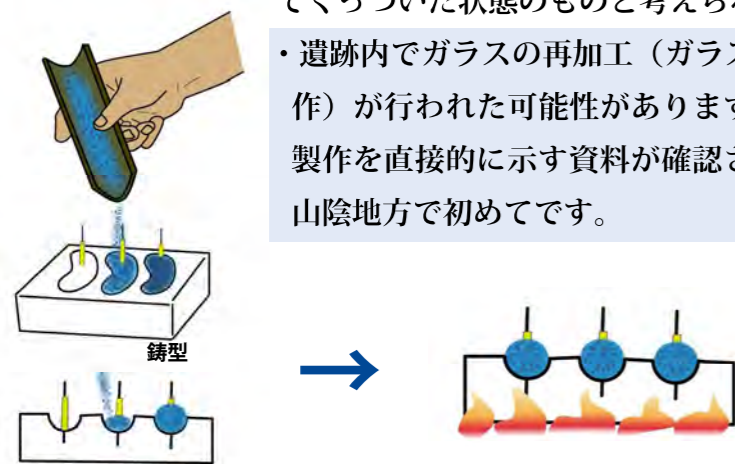


ガラス小玉、ガラス管玉



ガラス加工途中品 (長さ約8ミリ)

遺跡内でガラスの再加工(ガラス製品の製作)が行われた可能性があります。ガラス製作を直接的に示す資料が確認されたのは山陰地方で初めてです。



ガラス勾玉の作り方

(『ものづくりの考古学』(東京美術出版)掲載の図を基に作成)

【まとめ】

限られた調査面積ながら銅鏃、玉といった貴重な出土品が数多く出土し、青谷上寺地遺跡の「中心域」が重要なエリアであることを改めて確認しました。今後の調査で、ガラス製品や銅鏃を作った工房跡などがみつかることが期待されます。

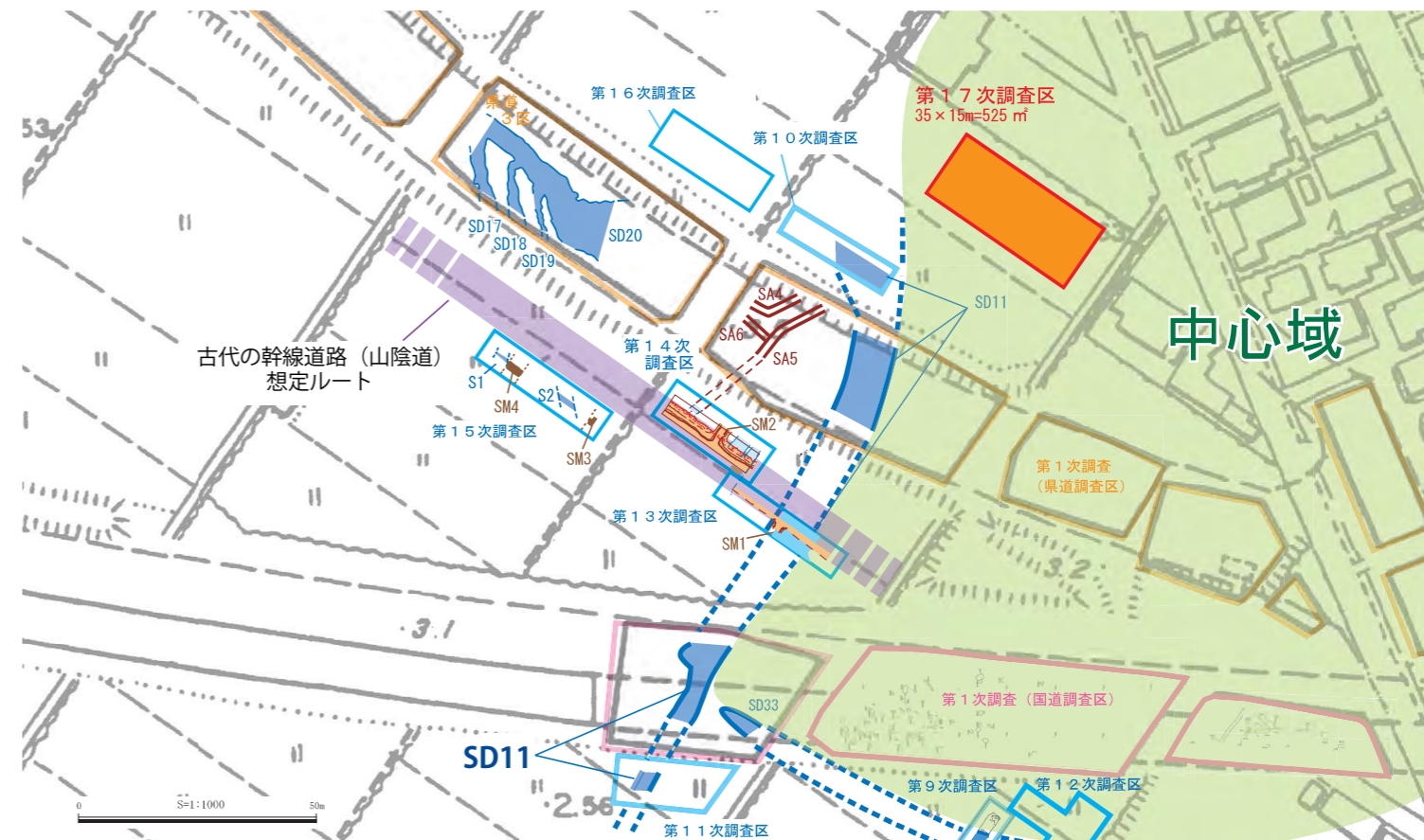
第17次調査の概要

- 調査面積 525㎡
- 調査期間 平成28年8月1日~11月下旬(予定)
- 調査主体 鳥取県埋蔵文化財センター
- 調査目的 (1)「中心域」内部における集落機能の確認  
(2)西側区画溝(SD11)の走向・規模の確認



第17次調査の目的

鳥取県埋蔵文化財センターでは、史跡整備に必要な情報を得ることを目的として、青谷上寺地遺跡の弥生時代後期後葉(2世紀後半頃)の集落の様子を明らかにするための発掘調査を継続して行っています。今年度の第17次調査区は、弥生人の活動の舞台となった「中心域」と呼ばれる集落の中心部分に位置しています。この「中心域」では、過去の調査でたくさんの出土品が見つっていますが、どのような建物が建っていたのかについてははっきりとわかりません。今年度の調査は、この「中心域」にどのような建物があり、弥生人がどのような活動を行っていたのかを確認することを目的としています。現時点で奈良時代頃まで調査が進んでおり、調査区四周の排水溝を掘り下げた土からは弥生・古墳時代の遺物が出土しています。



第17次調査区の位置